

連載 33 『会議は踊る』 オペレッタ映画の至高のそして最後の華

鈴木東民^{とうみん}『ナチスの国を見る』（福田書房、1934年）によれば、ナチスが台頭した議会で、反対派を嘲弄し、映画『会議は踊る』（エリック・シャレル監督）の主題歌を声高に投げつけたナチス党員がいたという。「ただ一度、二度とない」という翻訳のリフレインでも知られる華やかな主題歌である。

映画『会議は踊る』は、「会議は踊る、されど進まず」といわれたウィーン会議を背景にしたオペレッタ映画である。ウィーン会議とは1814年、ナポレオン・ボナパルト失脚後のヨーロッパの帰趨を話し合うための国際会議だった。膠着状態の会議の間隙を縫って、ロシア皇帝アレクサンドル一世（ヴィリー・フリッチ）とウィーンの手袋屋の娘クリステル（リリアン・ハーヴェイ）が、甘美な恋愛をくりひろげる。クリステルが皇帝との逢引きに出かける馬車の行程は、当時としては破格に長い移動撮影で、主題歌「唯一度だけ」はその心浮き立つような場面で歌われた。盗聴や手紙の盗み読みで情報収集にいそしむメッテルニヒ（コンラート・ファイト）と伯爵夫人（リル・タゴファー）——『カリガリ博士』の眠り男チェザーレと運命の女ジェーンとのコンビ！——のあやしげな場面もたのしい。製作は『カリガリ博士』と同じく、エーリヒ・ポマーであった。

『キネマ旬報』（1934年3月1日）は、「何人が見ても楽しく、面白く、そして人に幸福感を与へる映画。知



『会議は踊る』の主演、クリステル（リリアン・ハーヴェイ）とアレクサンドル一世（ヴィリー・フリッチ）

識階級には、取りわけて喜ばれる映画。レコードによる宣伝も充分きいてゐる筈である」（内田岐三雄）とその興行価値に太鼓判を押した。

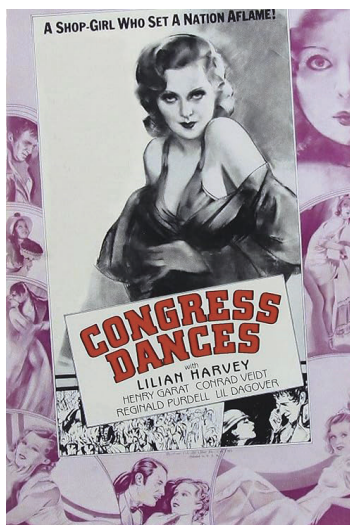
ドイツでは1931年に、日本では1934年に公開された。日本では楽譜、レコードともに大ヒットし、映画もくりかえし再上映されている。

室生犀星は原稿料をもらおうとすぐ帝劇で観たといい「移動撮影の速力が実によく足なみが揃うて、滴るばかりの快適な感覚は僕を酔はしてくれた」（『文芸林泉』中央公論社、1934年）と記した。

その主題歌「唯一度だけ」を議会の怒号に流用したナチス党員の意図は、批判勢力にチャンスは「二度とない」と誇示し、ナチス権力の永遠を謳歌することだったのだろう。ナチスが政権を把握すると、『会議は踊る』は頹廢芸術のレッテルを貼られた。

ユダヤ系だったエーリヒ・ポマーはフランスに逃れ、のち、アメリカで市民権を獲得した。エリック・シャレルもアメリカに活躍の場を求めた。リリアン・ハーヴェイ、コンラート・ファイトもそれぞれ国外に出た。

「ポムマーのない後に『狂乱のモンテカルロ』は作れないし、シャレルを逃がした後では『会議を踊る』を作る才幹は一人もゐない。国民は、素晴らしいウキーンのお酒の後で、情ないことに伯林製の電気ブランを呑んで我慢しなければならなくなつた」（『映画と



『会議は踊る』英語版DVD（Congress Dances, Reel Vault, 2015.）のパッケージ

民族』映画日本社、1942年）と、筈見恒夫は書いた。時節柄、同じ枢軸国のナチス・ドイツに配慮して「ナチス政府が良い映画を作つて、国民を愉しませることを禁止したのではない」と留保をつけているが、「残つてゐるのは二流以下」という筈見が、同時代のドイツ映画に対して不満を抱いていたことは、あきらかである。